

# 早稲田の青春

「人生劇場」の舞台

都 築 久 義

## はじめに

本稿は本誌前号（35号・平成22年3月）掲載の「尾崎士郎の落第——中学時代の人間形成」の続篇である。

## 一、早稲田大学高等予科

尾崎士郎は大正五年三月、愛知県立第二中学校（現、岡崎高校）を卒業した。ただし入学（明治43年4月）年次の一年生を落第しているの、旧制中学五年制のところを六年かかって卒業している。卒業成績は及第七四名中二六番で、落第が三名あった。同校は毎年、一五〇名くらい入学しているが、転校、落第、退学などの理由で入学者の半分くらいしか卒業しなかったようだ。

ちなみに、『愛知二中・岡崎中学・岡崎高校九十年史』（昭和62年

5月）によれば、尾崎士郎が卒業した大正四年度は、一年生の及第が一二九名、落第一一名、二年生が及第一二九名、落第一一名、三年生が及第一〇〇名、落第一〇名、四年生が及第八六名、落第八名、五年生は前述の通りで、全校では及第が五一八名、落第が四三名となっている。ついにながら、尾崎士郎が入学した年の一年次の及第は一一一名、落第は一三名であるから、尾崎は一三名の中に入っていたわけである。

当時の愛知二中は全校生徒の成績表を小冊子にして生徒に配布したらしく、父親が愛知二中の卒業生という人から「愛知県立第二中学校大正四年度成績表」をみせてもらい、コピーさせていただいたことがあり、『東海文学紀行』（昭和54年10月 中部日本教育文化会）に資料として載せた。成績表を見るとさすがに「国語及び漢文」の成績は抜群、特に作文と漢文は一〇〇点に近い。意外だったのは英語の成績が良いことで、「講読」が九〇点、「会話」も八〇点を越え

ている。

大塚有章が『未完の旅路』第一巻（昭和35年6月 三一書房）の「早稲田大学の予科時代」で、高等予科政治科Y組の授業風景を点描しているが、英語に自信のある者が教壇の前で訳読する授業だった、と述べている。

早稲田の制服をいつも着ていて、いがぐり頭で（盛んに教壇の前に立つ学生）尾崎士郎のこともここで詳しく述べている。彼が教室やクラスの懇親会で雄弁家ぶりを発揮していたことは想像できるが、英語の授業でも存在を發揮していたのは、中学時代の英語の成績も良く、得意科目であったからであろう。

尾崎士郎が愛知二中を卒業するとそのまま早稲田大学に進学したのは、中学四年の時に『世界之日本』の懸賞「選挙権は如何に拡張すべき乎」に応募し、「まづ教へよ」が三位に入賞（大正四年六月）したことが機縁であった。懸賞論文の選者が早稲田大学の永井柳太郎教授で、永井教授と文通を始めたことが動機だったとあちこちで回想している。もっとも、永井柳太郎教授との文通がなくとも、彼は中学時代から文学よりも政治に関心を持ち、文学青年ではなく政治青年だったから、政治専門学校の異名と伝統を誇る早稲田大学の政治経済学科に進学したであろう。

尾崎が早稲田大学に入学した頃は、私立大学は「大学」を名乗ってはいたが、公式には大学ではなく「専門学校令」にもとづく専門学校扱いであった。そのため私立大学は大学予備門的制度として高

等予科を設置していた。しかし、高等予科は文部省が定めた正規の制度ではなかったから、開設時期や修業年限などがあいまいだったようだ。

『早稲田大学八十年誌』（昭和37年10月）も、高等予科については「いづれにしても便宜的に、また内部的に設けられたもののようで、正式には許可があった卅四年四月が妥当な開設時期」であろうと記している。修業年限も半ヶ年であったり、一年であった時もあったりしたが、尾崎士郎が高等予科政治科に入学した頃は一年半だったと思われる。

というのは、かつて早稲田大学の教務部に尾崎士郎の入学と卒業年月について問合せた時（昭和53年5月）、入学は大正五年三月、卒業は大正六年七月という回答があったことは、拙著『若き日の尾崎士郎』（昭和55年1月 笠間書院）で書いた通りだ。

ついでながら、〈尚、念の為（略）その他の人の入学年月日は三月二十日から六月始めであり、当時は個人個人によって異ったものと思います〉とも書き添えてあった。前述の大塚有章の「早稲田大学の予科時代」には〈私の入学した政治経済学部予科はA組とY組に分かれていて合計して三百人近くもいたであろう〉と、当時の学生数にもふれている。尾崎士郎は早稲田大学に入学すると寄宿舎に入った。『わが青春の町』（昭和38年4月 河出書房新社）の冒頭に「弦巻町界限」の章を置き、この町のことを書いている。尾崎士郎にとって『わが青春の町』の最初の一頁が早稲田の寄宿舎のあった

「弦巻町界限」だったというのが象徴的だ。

早稲田に在学の五年間を通じて、私は下宿を転々と移った。最初、高等予科に入ったときには寄宿舎にいたが、この寄宿舎は、弦巻町の通りを、学校の方に向かって左に曲がった小路の中にあつた。(略)弦巻町が、今も昔も学生の町であることに変わりはないとしても、昔は青春の感情が町の両側をうずめる洋服屋、居酒屋、文房具屋、本屋、理髪店、西洋料理、ミルクホール、等々の一軒一軒に染みついていた。朝から夜ふけるまで学生の臭いが露地の隅々にまであふれていたのは、日夜、間断なく校歌がどこからともなくゆるやかな偕調をを伴ってびびいてきたからであらう。

その寄宿舎の建物については『私の履歴書』(昭和38年10月 日本経済新聞社)の中で次のように書いている。

大学の寄宿舎というと、いかにも近代的な装備のある大建築を想像するのが一応の常識であるが、この寄宿舎とくると、もう半分以上、朽廃して、屋台全体が傾きかかっているのを、やっと外から太い丸太で支えているという状態である。これとくらべたら岡崎中学の寄宿舎などは、一流のホテルといってもいい。とにかく、私は今まで、こんなひどいボロ建築を見たことがな

早稲田の青春 (都築久義)

い。しかし、それだけに、何となく古色蒼然たる梁山泊の観があり、学生たちの気風にもまた、そんなことを意に介しない悠揚たるものがあつた。この寄宿舎は、大正六年の学校騒動とともに閉鎖された。

寄宿舎の生活は「回顧」(初出不明『文学の零点』昭和42年8月 永田書房)の中で、政変が起こると寄宿舎に集って内閣を組閣し、酒宴を始めて外山ヶ原に出かけ、施政方針演説をして、青春の情熱の吐け口を求めたと書いている。そして次のようにも言っている。

政治専門学校から転化しただけに、早稲田スピリットの発祥地が政治科にあることはいうまでもないが、早稲田特有の校風をつくりあげたものは、大隈重信の人的魅力である。その校風の策源地は、専門学校時代からつづいている早稲田の寄宿舎であつた。(略)今、思い出しても流汗淋漓たる思い出は、大正五、六年の頃、舎生大会の席上で、思わず口がすべて舎長の弾劾をはじめてしまったことである。そんなつもりではなかったのだ。憲政擁護運動のさかんな頃で、私は弾劾演説の練習ばかりしていた……

この中で、(私は弾劾演説の練習ばかりしていた)と述べているが、

彼が大学に入学するとさっそく、活躍したのは雄弁会であった。『早稲田大学雄弁会一〇〇年史』（平成14年11月 早稲田大学雄弁会OB会）によれば、雄弁会は東京専門学校が早稲田大学に改称された明治三五年一二月に創設され、総裁に大隈重信総長、会長に安部磯雄教授が就任した。雄弁会の最高責任者に大隈総長を置き、「総裁」としているところに早稲田における雄弁会の立場と位置づけが伝わってくる。

早稲田の雄弁会は多くの政治家、政治評論家、新聞記者を輩出したが、とりわけ昭和の時代の末期から平成の時代の初期にかけて、竹下登、海部俊樹、小渕恵三、森喜朗の歴代首相がOBであったことから、「早稲田大学雄弁会」がマスコミで話題になったのは記憶に新しく、良くも悪くも彼らは早稲田を体現していた。

年表を見ると第一回の公開演説会が開かれたのは明治三十七年一月、大隈総長や高田早苗学長も登壇し、雄弁会創立の発起人だった学生の永井柳太郎も演説をしている。明治四一年から地方巡回講演にも出かけ、他大学の演説会にも出場していたようだ。尾崎士郎の名前も、〈大正5年11月25日、中大演説会（尾崎士郎出場）〉と出ている。この年表を見ると尾崎士郎は早稲田に入学して八カ月後に、早くも存在感を示していたことがわかる。

彼の一文は、「茫漠とした会の存在が権威」（『五〇年史』より）と題してこの本にも収録されている。

毎週土曜日に、練習会があり、正門の左側にあった木造2階建の講堂が会場にあてられていた。組織の主体は政治科の学生であったが、会員は文科、商科……と広汎にわたっていた、（略）雄弁会は、他の一面、校外の先輩と校内の後輩とをつなぐ交遊機関であり、毎週土曜日の夜ひらかれる練習会には、先輩として山森利一、栗山博、堀川直吉、西岡竹次郎等の諸君が時々顔を見せていた。毎年一回、全校の各科から選抜された代表者の演説大会があり、大会の後には安部教授を中心とする審査委員会が開かれて、第一位を獲得したものには、大隈総長の横顔を彫刻した「いぶし金」のメダルが授与された。このメダルの所持者が誇と栄光を感じたことは想像に絶するものがある。

尾崎士郎は〈早稲田スピリット〉は、政治科が発祥地であり、寄宿舍が策源地であったと言っているが、それを高揚させたのが雄弁会であったと思う。とすれば、尾崎士郎はまさに〈早稲田スピリット〉を雄弁会で満喫したことになるが、尾崎士郎にとって〈早稲田スピリット〉とは何であったのか。「早稲田大学について」の中でこう説明している。

早稲田スピリットとか早稲田気質といふものは何であるかといへば、これは、体臭のしみついた一つの空気といふべきもので、学校のワクをはなれた俗語をもつて分析すれば、一種の泥臭さ

であり、生活につながる意欲であり、野生であり、反思想的な人間味であり、振幅性の強い親和力であるといふことにならう。

『早稲田大学』昭28年10月 文芸春秋新社

## 二、早稲田の学校騒動

その〈早稲田スピリットとか早稲田気質〉が最も象徴的に発揮されたのが、ちょうど尾崎士郎が高等予科から、大学部政治経済学科へ進学する時に遭遇した世にいう学校騒動である。学校騒動といえば、例えば一九六〇年の安保闘争のように反政府、反体制闘争や一九七〇年の大学生が主体となって起こした全共闘運動を想起しちであるが、この時の早稲田の学校騒動はそうした政治運動や学生運動の類ではない。一言でいえば、次期学長をめぐる大学当局、教授団、学生、校友や学外の評議員などオール早稲田が対立、抗争を興した文字通りのお家騒動である。

学校騒動は次期学長をめぐる抗争であったと前述したが、具体的にいえば学長の任期が八月で満了する天野為之に退陣を求め、後任に前学長の高田早苗を担ぎ出そうとする声が、教授や校友の間から起こり、天野の留任を支持する者との間で、激しい抗争が展開されたということだ。

天野為之も高田早苗も東京専門学校以来のメンバーであるが、高田は明治四〇年に総長、学長制を施行した時に初代学長に就任し、

早稲田の青春（都築久義）

大隈重信が内閣を組閣した際に文相として入閣（大正4年8月）するまで学長を務めた。その後任に就任したのが天野である。しかし、大正五年一〇月、大隈内閣が総辞職し寺内正毅内閣が成立すると、高田も文相の地位を失ったことから、天野学長に反感や不満を持つ者たちが高田擁立の声をあげた。

騒動の発端は『早稲田大学八十年誌』によれば、大正六年一月の維持員会で臨時学制調査委員会の設置を討議した際に、天野学長案が認められなかったことになったという。数回の討議の末、六月の臨時維持員会で高田前学長に諸規定の改正立案を委任することを決定したことが、天野を刺激し、天野派の態度を硬化させたと記している。

事実、大正6年6月23日付の東京日日新聞が「早大学長は誰れ／天野学長は辞任し／高田博士は後任を拒絶す／学制は如何に改革される」と報道したことで、早稲田の学長問題が表面化し世間に知れ、問題を大きくしてしまったようだ。

尾崎士郎は学校騒動に学生の立場でかわって活躍したが、その顛末を自らは次のように述べている。

大正六年の早稲田騒動は、最初銅像問題といふ単純素朴、といふよりもむしろ児童に類するがごとき動機に端を発してゐながら、日が経つにつれ、再転して学長問題と結びつき、更に三転して学制改革の目標が表面へうかびあがり、それが外部の政治

的勢力によつて支へられるやうになつて、もはや、学生だけの問題でもなければ、教授の問題でもなく、学校内部の問題でもなくなつてしまつた。

（早稲田大学について）前出

尾崎はここで〈銅像問題〉に端を發したと書いているが、続けて「私はその銅像問題だけにおける首謀者の一人であつた」と述べている。銅像問題というのは大隈総長夫人の銅像建設反対運動のこと、『早稲田大学八十年誌』には載っていないが、「人生劇場」にはその様子が活写されている。実は学校騒動のことが報道され始めたさなか、東京日日新聞（大正6年9月6日）に銅像問題にふれた記事が出ている。

その記事によると、大正天皇即位の大典に総理の大隈と文相高田が列席し、大学でも慶祝行事を行ったが、その時の総長夫人の御大礼袴姿の銅像を校内に建てる話が進み、具体化した。そのことをかぎつけた学生が騒ぎ出し、建設中の銅像を壊してしまつた。時に大正五年十二月のことである。この記事の内容とほぼ同じことが「人生劇場」にも描かれている。

たしかに时期的にも内容的にも総長夫人の銅像建設問題は、学校騒動の核心である学長問題とは直接的な関係はない。しかし、大勢の学生を騒動に駆り立て、そのムードが学校騒動に結びついて行つたとすれば、尾崎士郎が言うように、学校騒動は銅像問題に端を發

したといえなくもなからう。

いずれにしても、学長問題が大学の内外に波及し、大騒動となつていったのは東京日日新聞が報道した六月二三日以降である。六月二九日には校友や学生有志が大学近くの矢来倶楽部に集まり、天野学長の留任を求める集会を開いたと東京日日新聞（大正6年6月30日）は伝えている。こうなると当事者の天野学長も頑になり、大隈総長遂に乗出す／早大の学長問題益々紛糾／維持員会は高田博士推薦／天野学長飽迄辞職せず（同前大正6年7月30日）という事態となつた。

膠着状態が続くなかで、学外の評議員会も東京に集まって全国大会を開き、夏休みで帰省していた学生も、色々な学生団体を結成し、天野派は早大革新運動本部を立ちあげて氣勢をあげた。天野派の中心人物は東洋経済新報の石橋湛山。雄弁会OBの最初の首相である。尾崎士郎は天野派の学生のリーダーであり、その活躍ぶりは新聞に彼の名前が頻繁に登場することが物語っている。

学校騒動のヤマ場は、八月末日に天野学長と一部の理事の任期が満了となつたのを機に、四人の理事が選ばれ、新体制が文部省に許可されるまで理事の一人が学長代行を務めることになつた時である。新理事会は永井柳太郎ら五名の教授の解任、六名の学生の退学処分、一五名の学生の父兄召喚を決定した。尾崎士郎も一五名の父兄召喚の一人であつた。処分は九月四日に発せられたが、父兄召喚処分を受けた一五名のうち尾崎士郎ら一名の学生は父兄を伴わ



ず、彼らのみで五日に二人の理事を訪ねた。

その模様を都新聞は〈学生の尾崎君は憤怒しながら曰く……〉(大正6年9月6日)と名前をあげて報じている。当日は午後六時から、校友や学生有志の革新派が八千代倶楽部で、早大新理事反対演説会を開いたが、この演説会で、〈理事との会見の顛末を尾崎君は語り……〉とも伝えている。

学校騒動のクライマックスは、新学期が始まる九月二日だった。前日の九月一日に評議員会や教授団の決議が行われたが、庄巻は早稲田劇場で午後五時から開かれた学生大会だ。都新聞(大正6年9月12日)によれば、〈定刻前より学生其他三千五百名参集し立錫の余地だに無し〉の状態で、〈早稲田神楽坂両署の警官殆ど総出〉だったという。

この物々しい光景の中で〈牛島氏先ず開会の辞を述べ次で尾崎、多門、石橋……〉の各委員は〈順次登壇して母校のため熱烈の弁を揮ひ喝采を博す〉と記事は続けている。この大会で三人の理事が〈早稲田大学との関係を絶対に絶つに至るまでは同盟休校〉することを決議した。当然のことながら三理事は辞職しなかったから、学生たちは大学に移動し、大講堂などを占居して立籠った。

そしていよいよ九月二日。都新聞は、〈早大幹部の総辞職／後継幹部は教授団と評議員会／学生団学校を占領す〉の見出しのもとに、当日の様子をつぎのように伝えている。

早稲田の青春 (都築久義)

十二日の早朝、早稲田大学の門柱には「全生徒同盟休校」と云ふ張紙が生徒らの手で貼られた、門扉はびたりと閉ざれて僅かに通用門が半開きにしてあるばかり、学生の大多数は前夜来大講堂に立籠もつて事務さへも生徒らの手に奪つて居た。(略) 学生等は早稲田全町の電柱と云はず家々の破目板と云はず土塀板塀などの隅々へ「全校同盟休業す生徒は直に学校大講堂へ集まれ」と云ふ意味の張紙をした。そして大講堂では演説を交る交るして居る処へ評議員の野間五造氏が来て生徒の代表者に向ひ調停の余地は無いかと尋ねた、生徒は余地は無いと答へた……

(大正6年9月13日)

ちなみに同日の東京朝日新聞の見出しは

早大無政府／六理事引責／革新団大學全部を占領／登校の教授を追払う

とあり、東京日日新聞には

校門を鎖す／白薔薇を与へて／学生を強要す

といった見出しも見られる。大学を占拠したのは、革新団を結成していた天野派で、むろん尾崎士郎も前述の通り天野派として行動

七

した。「天野学長は政治性を伴はぬ純無垢な学究の徒で、私ごとというべきものがなく、その上に名利に活潑」と評し、「天野学長に野心と人間的魅力があったなら」(略) 対社会的波紋は一層大きく広がったであろう」(「早稲田大学について」と言っている)。

この大学占居も三日目には正力松太郎方面監察官が仲介し、大学占居の指揮をとっていた石橋湛山も了承して、城を明け渡した。一〇日間の休校措置をとった大学当局も、九月二日から授業を開始して学校騒動も幕を閉じた。

大学当局は平沼淑郎を新たに理事に選任し、彼を代表理事・学長代行に選び、一年後の大正七年一〇月、正式に学長に就任した。その年の一二月に「大學令」が新しく公布され、この「大學令」にもとづく大学の設立の準備を進め、大正九年二月に認可され、名実ともに早稲田大学が誕生した。これを機に高等予科が廃止され、高等学院が開設されたことはすでに述べた通りだ。

へしかし、新しく形を整へた早稲田大学には、もはや私たちの魅力の対象となるべきものはなかった」へもし、早稲田スピリットとか早稲田気質とかいふものに愛着をかんずる人たちがゐるとしたら(私もまちがいになくその一人であるが) 早稲田大学は大正六年の学校騒動を限界として滅びたといふ意見に共感の意を表してくれるであらう」(「早稲田大学について」)。

学校騒動が終焉した大正六年九月、大学部部政治経済学科へ進学したが、大正八年一月、〈長期欠席〉で除名された。

### 三、やうば早稲田大学

学校騒動後に新しく形を整えて生れ変わった早稲田大学には、へもはや私たちの魅力の対象となるべきものはなかった」とすれば、次に尾崎士郎が魅力を感じて向かったものは何であったのか――。手許に内務省警保局の極秘文書『特別要視察人状勢一班』の復刻版(近代日本史料研究会編 明治文献資料刊行会 年月不詳)があるが、ここには各地における特別要視察人の最近の言動や組織の活動が載っている。

その〈第八〉(大正七年五月一日調)の、内地在住者の「東京」の項に尾崎士郎の名前があがっている。

(P) 尾崎士郎(大正六年十二月二十四日 特別要視察人ニ編入)ハ時々演説会ニ出席シ民主思想ノ勃興ハ自然ノ超勢ナルヲ説キ選挙権ノ拡張ヲ要求スルノ言ヲ吐ケリ本人ハ全国青年学生急進団ノ主催に依リ大正七年二月二日午後一時日比谷公園ニ開催ノ筈ナリ閥族撲滅全国青年大会(開会前所轄署ニ於テ中止ヲ命シタリ)ニ参加シ不穩ノ挙ニ出テントセル行動アリ同日未明ヨリ牛込神楽坂警察署ニ検挙セラレタリ本人ハ又同年四月七日大杉栄ノ計画ニ依リ開催シタル露国革命記念会B(Cノ記事第五項参照)ノ開会通知書ニ世話人ノ一人トシテ記名セリ



ちなみにここに載っているのは、堺利彦や大杉栄ら一七名で、尾崎士郎は一六番目に出ている。実は別の記事にも、尾崎士郎の名前が登場する。「三 普通選挙運動ト要視察人（イ）普通選挙同盟会（東京）」に関する記事の中だ。

大正七年一月二十日頃ヨリ二月二十日迄ノ間ニ於テ市内各所ニ普通選挙運動ヲ目的トスルコトヽシ第一回ハ神田区美土代町青年会館ニ於テスルコト演説主任ヲ藤田貞二、北原龍雄トシ尚累ニ早稲田大学紛争事件ニ関シ退学処分ヲ受ケタル学生数名ヘ該学生中ニ茂木久平及尾崎士郎（大正六年十二月二十四日 特別要視察人ニ編入）アリ）ヲ加フルコト

「普通選挙同盟会」というのは、松尾尊允の「普通選挙運動の史的考察」（『大正デモクラシーの研究』一九六六年八月 青木書店）によれば、医師である加藤時次郎が中心になって結成した普通選挙運動再興の組織である。大正六年一月六日に加藤時次郎宅に堺利彦ら一九名が集まり、運動方法などを協議し、この会合に尾崎士郎も参加している。ここで演説会の開催や請願デモのことを話し合い、第一回演説会を大正七年一月二四日に開くことや二月九日に国会に請願デモを行うことを決めた。

しかし、演説会の前日に加藤時次郎が当局に召喚され、演説会の禁止を申し渡されると、加藤は普通選挙運動から身を引いてしまっ

早稲田の青春（都築久義）

た。尾崎士郎らの若手は加藤が身を引いたことをなじって運動を継続しようとしたが、実現にいたらなかった。尾崎士郎は前引のように、二月二日の「閩族撲滅全国青年大会」に参加して神楽坂警察署に検挙され、北原龍雄らも請願デモの前日に検挙されてしまったからである。

尾崎士郎がデモクラシー雑誌『第三帝国』を中学時代に購読し、投稿もしていたことや、『世界之日本』の「選挙権は如何に拡張すべき乎」の懸賞に応募して三位に入賞したことなどを想起すれば、早くから普通選挙に関心を持っていたはずだから、学校騒動後は普通選挙同盟会にかかわり、いよいよ実践運動に身を投じていったのも当然のことであろう。

普通選挙同盟会を率いていたのは加藤時次郎であるが、この同盟会は売文社の堺利彦も深く関係していたから売文社に頻繁に出入りしている尾崎士郎が、売文社がらみでもこの組織と関係を持っていったのであろう。尾崎士郎はまた上京すると売文社だけでなく、前述の『世界之日本』の主筆者橋本徹馬も訪ね、親交を深めている。もっとも同誌は大正五年三月に『一大帝国』に誌名を変え、立憲青年党の再興を企て、同党の機関誌となっていた。尾崎が訪ねたのは大正六年一月の新年会で、その場で『一大帝国』の記者として入社し、大正六年三月号『一大帝国』に「入社に臨みて」を書いている。

橋本さんは来いといふ。声に応じて自分は行かうと答へた。其

処には何の契約もなければ、何の難づかしい交渉も無い。私と橋本さんの関係は単に私が一大帝国記者となることに依て、より濃厚にもならなければ、より稀薄にもならない。私は橋本さんを知る事古き者である。同時に又深き者である。

尾崎は『一大帝国』の記者として入社しているが、大正六年五月号に「民軍凋落の教訓——選挙権拡張の急務を論ず」他一本と、十一月号の二本だけで入社当初はあまり書いていない。むしろ彼は得意の演説会で活躍している様子が報告されている。同誌を通覧して目を引いたのは大正六年九月号の「編集室より」に〈同人尾崎士郎は目下放浪中〉という記事だ。学校騒動の渦中で奔走していたことをうかがわせる。

学校騒動も終った大正七年になると、一月から四月まで毎号執筆し、五月から八月までは載っておらず、九月から十一月まで再び、登場する。しかしその後は見当たらない。ただし大正七年以後は、「小説・白日の下に生きて（其一）」といった題名から推測されるように、政治からの離脱を示唆する文章を書いているのが興味深い。

それとはともかく、尾崎士郎は学校騒動後は、大学部政治経済学科に進学したものの、『特別要視察人状勢一班』が示す通り、演説会に出ては〈選挙権ノ拡張ヲ要求スルノ言ヲ〉吐いて検挙されたり、大杉栄が企画した〈露国革命記念会〉の世話人になったりするなど、特別要視察人として目をつけられるほど過激な生活を送っていた。

ところがそんな矢先の大正七年六月二二日、生家の三等郵便局の跡を継ぎ、尾崎士郎にも送金をしていていた長兄がピストル自殺するという一大事件が起きた。郵便局の公金横領の罪を負った自殺であつたから、生家が崩壊しただけでなく、尾崎家は故郷・横須賀村を追われてしまい、遺された一家は東京への移住を余儀なくされた。「人生劇場」では、父・瓢太郎が商売に行き詰まって、ピストル自殺をする話になっているが、現実には兄が自殺し、村を去って行ったのである。

『特別要視察人状勢一班』（前出）には、大正七年七月から九月にかけて全国で起こった米騒動に関連して、尾崎士郎も検挙されたことが載っている。

東京在住要視察人ニシテ騒動事件ニ関与ノ処アリト認メ行政執行法第一条ニ依リ警視庁ニ於テ臨機検挙処分ニ付シ（略）大正七年八月一四日以降連続処分ニ付シ同十六日解除

とあるが、兄の自殺で帰郷し、身边はそのことに追われていたはずだから、米騒動にかかわっている気分にはならなかったであろう。兄の自殺と生家の崩壊という身辺事情があつて、米騒動にかかわることはなかったが、送金が途絶えて自活の道を余儀なくされ、彼も「月給生活」を始めたとして「新聞記者」で語っている。

僕にも月給生活の経験がある。(略) 最初は「東洋経済新報」でこれは郷里で兄がピストル自殺をしたために一家離散の悲運にあひ、その頃早稲田大学の学生だったが、学資がつかなくなつたのを学校騒動で知合ひになつた石橋湛山氏が同情して、午後二、三時間だけ出社して金二十円の支給をうけることになつたのである。それもせいぜい半年くらいであつた。その金は結局一文も月謝にならなかつたが、あるとき病氣と称して社を数日間やすみ、流連荒亡のあげく、退社し、次に売文社に〈月給三十円〉で入社した

〔「新聞記者」初出不明 隨筆集『牛刀』昭和11年6月 竹村書房〕

とある。ただし尾崎士郎が売文社に「月給社員」として入社したのは、大正七年一〇月の頃と推測されるので、東洋経済新報への入社と退社の時期には記憶の誤りか、事実の誤認があると思われる。

売文社は堺利彦、山川均、高畠素之の三人の幹部を中心に経営され、若い社員が六人ほどいて、尾崎士郎と早稲田以来の親友である茂木久平と一緒に入社した。尾崎は入社するとさっそく機関誌『新社会』に執筆している。大正八年一月号に「禿頭と香典」、「学者の迷論」、二月号に「黎明会聴講の記」、「人物論讃」、三月号に「社会主義の君主と民主」、「普通選挙運動語録」などを書いて存在感を現した。

ところが尾崎士郎が売文社で頭角を表し始めた大正八年三月、売

文社は堺利彦、山川均と高畠素之が運動論をめぐる分裂する。高畠は国家社会主義の旗揚げをし、尾崎士郎、茂木久平、北原龍雄、遠藤友四郎らが追隨した。これを機に尾崎士郎もしだいに社会主義と社会主義運動に疑問を抱き始め、政治から離れて行った。

「人生劇場の青春篇」は早稲田騒動のことを中心に描いていて、彼自身のその後の社会主義運動や売文社の活動についてはふれていない。尾崎士郎にとって「青春」は早稲田であって政治運動ではなかったからにちがいない。